令和２年度出土遺物公開事業関連講演会

「北 方 交 流 録」
～北とつながる五つの物語～

講演要旨

令和３年１月31日（日）
於：千葉県立中央博物館講堂

主催：公益財団法人 千葉県教育振興財団
共催：千葉県立中央博物館、流山市立博物館、芝山町立芝山古墳・はにわ博物館
後援：千葉県教育委員会、流山市教育委員会・芝山町教育委員会

プログラム

1　開催挨拶　10：30 ～ 10：50　　公益財団法人千葉県教育振興財団 理事長　稲葉　泰
千葉県立中央博物館 館長　古泉　弘志

2　講　　演　　※講師は財団職員

「日本列島北から南から－技術と使用石材の変化からみた集団の土着化－」
10：50 ～ 11：35　橋本　勝雄

「銛頭からみた地域間交流」
11：35 ～ 12：20　服部　智至

「弥生再葬墓と地域間交流」
13：20 ～ 14：05　渡邉　修一

「房総から南東北へ－人とモノの移動－」
「東北から房総へ－俘囚の移配－」
14：15 ～ 15：30　栗田　則久

3　閉　　会　15：40

日本列島、北から南から

―技術と使用石材の変化からみた集団の土着化―

橋　本　勝　雄

はじめに

千葉県の旧石器時代の遺跡からは、しばしば東北地方の硬質頁岩（以下「東北頁岩」）を用いた石器が発見されます。これらの東北頁岩製石器は、当時の交流のあかしといえます。これから紹介する北方系細石刃石器群と国府石器群は、まさにその代表格です。特に、千葉県の石器群は質量ともに備わり、全国的に広く知られています。

今回は、北方との密接な交流を物語るこれらの二つの石器群とヒトとのかかわりを展示紹介することによって、旧石器人のくらしぶりに多少なりとも触れていただきたいと思います。

1　北方系細石刃石器群の南下

（1）北方系細石刃石器群とは何か

旧石器時代の終わりに近づくと、旧石器人は、溝を刻んだ動物の骨や角の軸に細石刃を何本も差し込み、松ヤニや天然アスファルトなどで固定して刃物や槍（「植刃器」）として使用するようになりました。細石刃とは、細石刃核から剥がされた小型（長さ3～4cm、幅0.5cm程度）で細長い石のかけらです。植刃器は刃こぼれした細石刃を部分的に交換すれば良く、節約型の石器と言えます。

北方系細石刃石器群（以下「北方系」）は、このころ登場した細石刃を使用した石器群のうち、北海道方面から本州にもたらされた北回りのものです。湧別技法によって作られた細石刃・細石刃核、荒屋型彫刻刀形石器、角二山型掻器を特徴的に伴います。ほとんどの石器石材が東北地方に産する硬質頁岩（「東北頁岩」）で、しかも石器が完成品の状態であることから、その大半が東北地方で製作され、人々の南下とともに関東へ運ばれてきたことがわかっています。

湧別技法　この石器群の主な石器である細石刃は湧別技法によって作られています。湧別技法（図１）に類似した資料は、中国・シベリアなどで広く認められており、当時の日本列島と周辺地域との関連性を考えるうえで重要な手がかりとなっています。

遺跡の分布　現在、関連遺跡は全国で188か所（東北46、北陸29、関東77（北関東32、南関東45）、中部高地19、近畿5、中・四国12）を数え、遺跡分布の南限は、日本

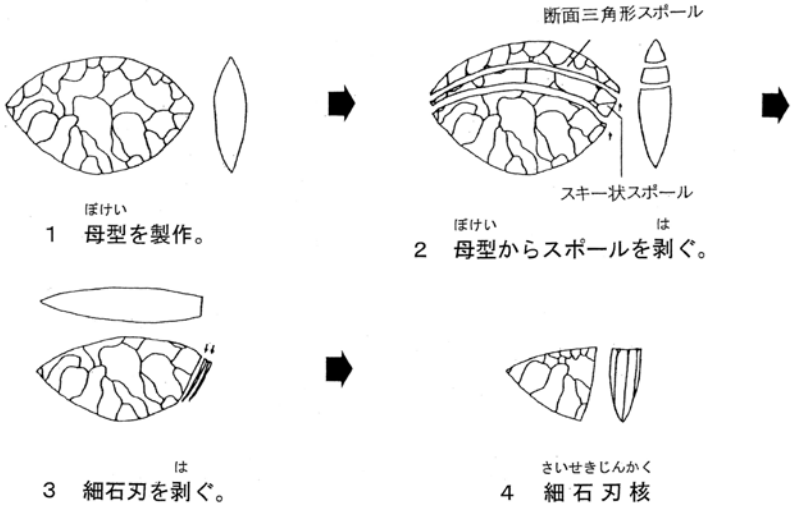


図1　湧別技法

図２　北方系細石刃石器群の一例
（多古町一ツ塚遺跡）

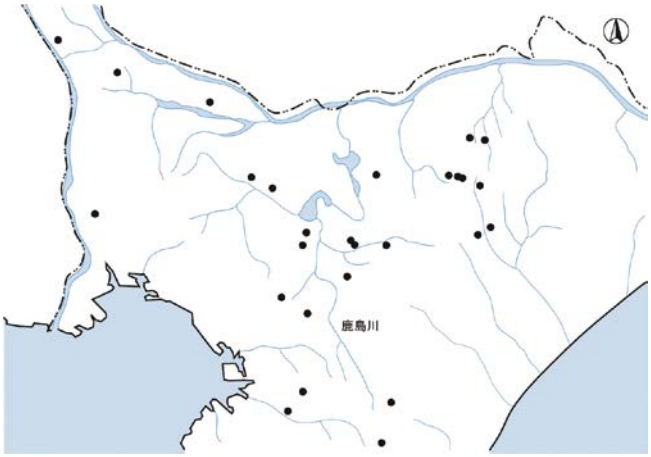


図３　下総台地における
北方系細石刃石器群の遺跡分布

海側が山口県宇部市（川津遺跡）、太平洋側は下総南部の袖ケ浦市（東上泉遺跡）に及んでいます。千葉県では昭和57年に佐倉市木戸場遺跡で初めて発見され、現在ではその遺跡数は本州最多の30か所に達しています。

生業　北方系の登場には生業が大きく関与している公算が大きいようですが、今のところ分布・立地を主な論拠とした「内水面漁撈説（河川や湖沼等での漁撈）」とシベリアの事例をもとにした「鹿猟説」の二説があり決着がついていません。ただし関連遺跡は、先に述べたように太平洋側が古利根川流域（現・荒川低地）、日本海側の中国地方が南限となっており、サケ類（産卵遡河性魚類）の天然遡上の分布と合致することから、前者が有力視されています。

ちなみに、遺跡分布が稠密な千葉県の下総台地では、関連遺跡が特定の河川の流域に集中することが指摘されており、内陸の印旛沼水系に偏在しています。特にその傾向は、鹿島川流域で顕著であり、その流域には、河口部にほど近い佐倉市の木戸場遺跡Ａ地点・高岡遺跡群（高岡大福寺、高岡大山）から、源流部の大網白里市升形遺跡と千葉市中鹿子第２遺跡に至るまで全域にわたって遺跡が分布しています。このようなあり方は、あたかも「内水面漁撈説」を立証しているかのようです。

（２）北方系の南下がもたらしたもの

技術と石材の変化　成田市東峰御幸畑西（空港№61）遺跡では、本来の湧別技法にはない作業面再生剥片のほかに、明確な打面再生剥片と、側面・稜再生とも言うべき細石刃石核の再生（調整）剥片が検出され、そのような再生剥離作業と細石刃剥離作業の繰り返しのために変形（小型化）した細石刃石核が発見されています。このような徹底消費の一環としては、このほかに細石刃核の母型（破損品）からの掻器への転用が窺える袖ケ浦市東上泉遺跡、両面加工石器の破片を細石刃核に再利用した成田市大栄十余三新堀遺跡があります。

ライフスタイルの変化　北方系集団の暮らしの基本は、生業の季節性（サケ漁）と原産地（関東については東北頁岩）を核とした回帰の二点にほぼ集約されますが、そのためには湧別技法のような効率的で可搬性に富む技術が不可欠でした。むろん、技術面ばかりではなく集団の行動様式も相応に効率的で組織的であったものと考えられます。おそらく生業のシーズンには、東北から関東に移動し、その途上で在地石材による礫器や砥石を、シーズンオフには、食糧（保存食）を携えて東北方面に帰還し、硬質頁岩の原産地で細石刃や荒屋型彫刻刀・角二山型掻器などを製作・補給し、翌年に備えたのでしょう。こ

のような回帰的なくらしを支えるために相応の行動形態（装備の補給と生業とのリンク）、すなわち、石材産地・中継地・消費地という物流のネットワークの構築の必要性が生じたものと考えられます。しかし、時が進むにつれて回帰からしだいに非回帰（土着化）に転じ、別の生業によるフルシーズンの活動に至ったものと推定されます。

２　国府石器群の北上と南下

（１）国府石器群とは何か

国府石器群とは、瀬戸内技法を背景とした国府型ナイフ形石器を保有する石器群です。年代は後期旧石器時代の中葉（約30,000前）前後で、近畿以西の瀬戸内地域にその起源が求められています。この石器群の標式となっている大阪府藤井寺市国府遺跡の出土資料は、国府型ナイフ形石器、翼状剥片、翼状剥片石核など比較的単純な石器組成からなり、石材にはサヌカイトの円礫が用いられています。

瀬戸内技法と国府型ナイフ形石器　瀬戸内技法は近畿西部・瀬戸内中央部のサヌカイト地帯で発達した組織的な石器製作技術であり、おおむね三つの工程（第１工程：翼状剥片石核の素材となる大型剥片の生産。第２工程：規格性に富む翼状剥片の生産。第３工程：翼状剥片を素材とした国府型ナイフ形石器の製作）で構成されています（図４）。

さて瀬戸内技法には材料のロスが多く生産性が低いという固有のマイナス面があります。一枚の盤状剥片から生産される翼状剥片は数枚といわれており、しかも二次加工の段階でしばしば垂直割れが生じ、最終的に完成に至るものは僅かです。さらに剥片を石核の素材として使用するために大型の原材を必要とします。いきおい瀬戸内技法は安山岩系や下呂石等の、大型石材が潤沢な原産地で発達する傾向にあり、分布域内では各地で石材原産地を単位とした物流のネットワークが形成されています。

国府石器群の分布　国府石器群の確実な資料は日本海側では山形県（越中山遺跡Ｋ地点ほか）、太平洋側では静岡県西部（静岡県磐田市匂坂中遺跡群のサヌカイト製翼状剥片石核や広野北遺跡における瀬戸内技法の存在）が遺跡分布の限界といえます。

関東では、主に南関東に遺跡が集中しています。千葉県でも、これまでに柏市大松遺跡・原畑遺跡・小山台遺跡、白井市一本桜南遺跡・白井第一遺跡、松戸市彦八山遺跡、船橋市源七山遺跡、千葉市鷲谷津遺跡・椎名崎古墳群Ｂ支群、市原市鶴牧遺跡、我孫子市鹿島前遺跡、印西市油作第２遺跡、山武郡横芝光町西長山野遺跡等の比較的多くの関連遺跡が報告されています。

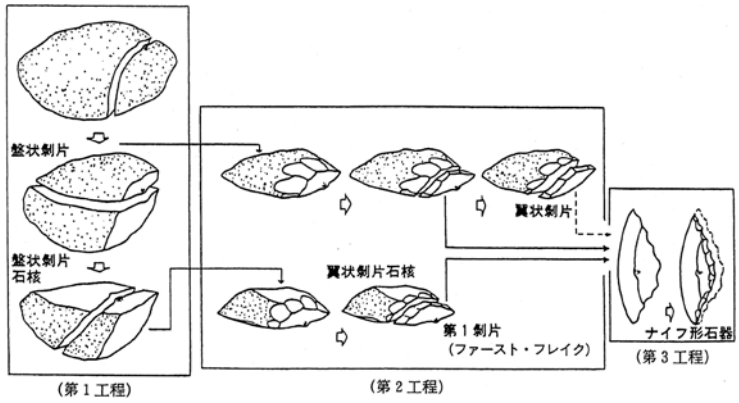


図４　瀬戸内技法

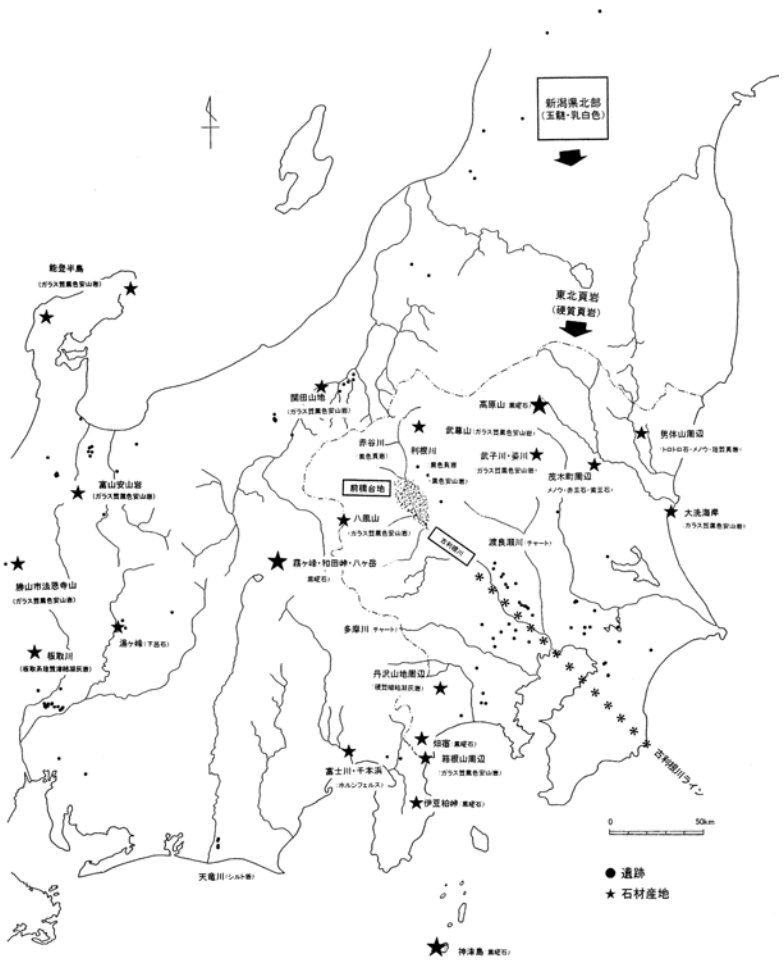
図５　瀬戸内技法の試作品
（橋本勝雄製作）

（2）東北地方からの南下が関東にもたらしたもの

技術の変化　瀬戸内技法が石材のロスが大きく大型の盤状剥片を石核の素材とすることから、その実現には原石の相応の大きさと量的保証、及びサヌカイトに似た割れやすさ（剥離特性）が要求されます。南関東では、このような大型でサヌカイトに似た剥離特性をもつ石材に欠けるために、地域ならではの技術的な変容を遂げており、有底横長剥片を素材として国府型本来のイメージを残しつつ、製作工程よりも結果重視の便宜的な製作技術に変化したといえます。

石材の変化　関東の関連資料の石材については 、東北頁岩（硬質頁岩）、玉髄（ぎょくずい）、黒色頁岩、ガラス質黒色安山岩（利根川系等）、黒曜石、チャート、凝灰岩（ぎょうかいがん）、珪質頁岩（けいしつ）、凝灰質頁岩、流紋（りゅうもん）岩質凝灰岩、流紋岩、白滝（しらたき）頁岩、ホルンフェルス（計13種）が報じられています。数量的にはガラス質黒色安山岩、凝灰岩、黒色頁岩、黒曜石が多いようですが、ガラス質黒色安山岩・黒色頁岩は主として群馬・埼玉・東京、古利根川沿い、凝灰岩は相模野台地、黒曜石は大宮台地に遺跡が集中しています。このうち黒曜石については信州系が主体であり、その他の産地については伊豆系が相模野台地や箱根・愛鷹（あしたか）山麓に散見される程度です。全国的には安山岩系との結び付きが強いようですが、どうやら関東は異なるようです。

製品の流入とその要因　千葉県をはじめとした南関東では、東北頁岩や玉髄などの遠隔地石材製の国府型ナイフ形石器の搬入（「外来的性格」）と在地石材製の国府型に類似する製作技術（有底横長剥片製のナイフ形石器の生産）の登場（「内在的性格」）という二つの側面がみられます。



東北頁岩製の製作地については、石材原産地と関連遺跡の分布域を勘案すれば、新潟県北部かもしくは山形県内に所在したことはほぼ確実です。一方、玉髄の産地については、野外調査の結果や考古遺物の多寡（たか）から新潟県北部方面が想定されます。

遺跡の分布や技術の変化から、国府石器群は当初、近畿・瀬戸内方面から日本海に沿って東北地方南部に至り、その後、最終的に関東に伝わり土着化したことが理解できます。旧石器人の移動の要因はさまざまであり、主なものとしては、気候変動（寒冷化）、自然災害（火山災害、地震）、狩猟採集などの生業に伴う季節的な移動が想定されますが、残念ながらこの石器群に限っては明確な答えがないのが現状です。謎は深まるばかりです。

図６　東日本における国府石器群の関連遺跡と石器石材の交流

銛頭からみた地域間交流

服　部　智　至

はじめに

縄文時代における列島規模での地域間交流を示す資料は全国各地で数多く見つかっています。例えば、神津島産などの黒曜石や新潟県糸魚川産のヒスイ、秋田県産の天然アスファルト、南海産の貝類などはその代表例です。特定の地域に産地が限定されるこれらの資料が各地で発見されていることから、縄文時代にはすでに複雑な交流網ができあがっていたのではないかとまで考えられるようになってきました。ここでは、関東・東北地方の貝塚から出土した銛頭を対象に、漁撈活動という側面から縄文時代の人々の交流・交易の様相についてアプローチしてみたいと思います。

1　銛頭の分類と分布

銛頭（もりがしら）とは、銛の先端に装着する刺突具（しとつぐ）のことを指し、主にイルカやアシカ・トドなどの海獣類やマグロなどの大形魚を漁獲するための漁撈具（ぎょろうぐ）と考えられています。銛と同様の構造をもつ漁撈具に“ヤス”と呼ばれるものがありますが、銛とヤスの違いは実のところ明確ではありません。「柄（え）から外れるようになっているものを銛、柄に固定されているものをヤス」とするのが一般的ですので、ここでは「柄に装着する刺突具のうち、先端部の銛頭が柄から外れるようになっている漁撈具」のことを指すことにします。

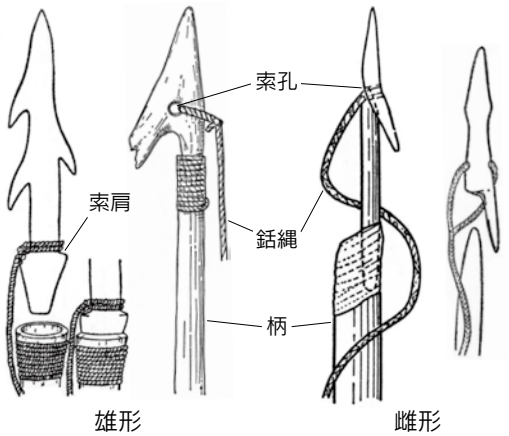


図１　銛頭の装着例（金子1973）

縄文時代の銛頭は、その機能に関わる２つのポイントに注目して分類することができます。１つめのポイントは“柄への装着方法”です。これには２通りあり、銛頭を柄に差し込む“雄形（おすがた）”と、柄を銛頭に差し込む“雌形（めすがた）”に分けられます。２つめのポイントは、“銛縄（もりなわ）の装着方法”です。銛頭には、獲物に突き刺さり、柄から外れた後に獲物を手元に手繰（たぐ）り寄せるための銛縄が装着されています。この銛縄を装着する構造の違いから、“索孔（さくこう）”をもつものと“索溝（さくこう）や索肩（さくけん）”をもつものの２通りに分けることができます。

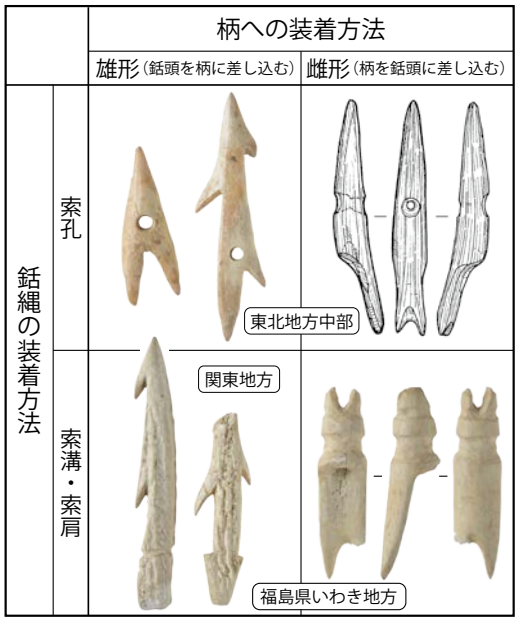


図２　銛頭の分類

千葉県や神奈川県などの関東地方の貝塚では、中期～晩期にかけて、鹿の角で作られた“雄形”銛頭が出土し、後期においてその最盛期を迎えます。特に、各時期を通して“索溝や索肩”をもつタイプが盛行することに特徴があります。一方、仙台湾や三陸南部をめぐる東北地方中部の貝塚では、中期から後期にかけて、関東地方と同様に

鹿の角で作られた“雄形”銛頭が出土し、晩期になると雄形銛頭に代わって“雌形”銛頭が発達するようになります。後・晩期を境に雄形から雌形への転換という画期があるものの、東北地方中部でみられる銛頭はいずれも“索孔”をもつタイプであることに特徴があります。

このような銛頭の分布状況から、関東地方には“索溝・索肩銛頭文化圏”、東北地方中部には“索孔銛頭文化圏”という、異なる系譜の銛頭を媒介とした２つの文化圏が対峙するように展開していたと考えられます。

図３　２つの銛頭文化圏

２　関東地方の銛頭

逆鉤（あぐ）の付き方と銛縄の装着方法に着目してみると、中期の銛頭では、銛縄の装着部に関東地方の特徴である索溝がめぐり、多段の逆鉤が器体の片側に付く例が一般的です。索溝だけでなく、「初現段階からすでに逆鉤が複数（多段）であること」もポイントの１つです。後期になると、索溝に代わって索肩をもつ形に変化し、逆鉤が両側に付くようになります。後期の中頃には、これまで東京湾沿岸を中心に発達していた銛頭は、古鬼怒湾周辺にも新たに展開していきます。なかでも古鬼怒湾湾口部に位置する銚子市余山（よやま）貝塚では、索肩を持つ銛頭が多数出土しています。一方で、東京湾沿岸ではこれまで索溝や索肩をもつ銛頭のみであった様相に大きな変化がみられるようになります。それは、東北地方中部と同じ特徴である“索孔”をもつ銛頭の出現です。この索孔をもつ銛頭は、後期の中頃には東京湾沿岸の神奈川県称名寺（しょうみょうじ）貝塚や千葉県館山市大寺山（おおでらやま）洞穴などで特徴的にみられます。これ以降、資料は少ないものの関東広域に分布を拡大し、後期の終わり頃には伊豆諸島新島に位置する渡浮根（とぶね）遺跡などでも見られるようになり、成田市荒海（あらみ）貝塚の例のように晩期にまで断片的に継続します。

３　東北地方中部の銛頭

仙台湾をめぐる地域では、中期から後期にかけて「南境（みなみざかい）型」・「沼津（ぬまづ）型」と呼ばれる、雄形で索孔をもつ銛頭が発達します。中期後半から後期前葉にかけて盛行した南境型の基本的な形態は、矢じりに似た形をしており、分岐する片側が柄に装着する基部、もう片側が逆鉤の機能を持っています。南境型は「古式離頭銛（こしきりとうもり）」とも呼ばれ、後期前葉から出現する沼津型の祖形になったと考えられています。宮城県南境（みなみざかい）貝塚出土の銛頭をもとに、南境型から沼津型への発達過程をみていくと、いずれも索孔をもつ点は

共通していますが、鏃形を呈するものから、逆鉤が分岐するもの、片側に２本の逆鉤が付くもの、両側に交互に逆鉤が付くもの、の順に変化することがわかります。初期の南境型からわかるように、東北地方では「初現段階では逆鉤が１つであること」、そして「沼津型へ変化していく過程で逆鉤が多段化していくこと」がポイントです。

図４　東北地方中部の銛頭

４　２つの銛頭文化圏の関わり合い

両者を比べてみると、特に「逆鉤の発達過程」と「銛縄の装着方法」という２つの点においてそれぞれが異なる特徴を持っていると言えます。一方で、関東地方において東北地方の特徴である索孔をもつ銛頭が出現するなど、両文化圏の関わりも見受けられます。

沼津型銛頭の出現の背景　関東地方では中期の段階ですでに多段の逆鉤をもつ銛頭が存在するのに対し、東北地方中部では逆鉤を１つだけもつ初期の南境型から多段の逆鉤をもつ沼津型へと次第に変化していきます。このように、関東地方の銛頭がより早い段階に逆鉤を発達させていることから、東北地方における沼津型銛頭の出現の背景には、多段の逆鉤を先行して発達させていた関東地方からの影響を垣間見ることができるかもしれません。

関東地方における索孔の導入　後期の中頃以降になると、索溝・索肩銛頭文化圏である関東地方でも、館山市大寺山洞穴などで索孔をもつ銛頭が出現するようになります。この索孔の位置に注目すると、一番下の逆鉤の根本、器体の中心軸から逆鉤寄りに少しずれた位置にあることがわかります。関東地方の銛頭だけではこの位置に索孔を設ける理由を説明できませんが、東北地方中部の銛頭をみると南境型以来の伝統であることがわかります。

ここで注意したい点は、「関東地方で出土した索孔をもつ銛頭は、東北地方中部の沼津型銛頭そのものではない」ということです。というのは、これらの銛頭が関東地方の索肩をもつ銛頭の特徴をも併せ持っているためです。銛頭の下端に設けられた平坦面は、東京湾沿岸の後期の銛頭に共通する特徴であり、南境型や沼津型銛頭のような端部が尖る形とは明らかに異なります。さらに興味深いのは、大寺山洞穴出土の銛頭には、索孔だけでなく、関東地方の伝統である索肩も設けられていることです。これらの銛頭が意味することは、“銛頭そのもの”が東北地方から関東地方へもたらされたのではなく、“銛頭に索孔を設ける”という銛縄の装着方法（技術）がもたらされ、この技術を導入した関東地方の縄文人の手によって、これらの銛頭が作られたということです。

図５　銛頭にみる交流の証

５　漁獲対象

関東地方の銛頭は、称名寺貝塚や鉈切（なたぎり）洞穴などのように、東京湾沿岸でも特に湾口部に近い外湾域で多く出土する傾向があります。これらの遺跡ではイルカの骨が大量に出土することから、大型の銛頭は

イルカ漁に使われた可能性が高いと考えられています。しかし、中期の銛頭が出土する千葉市加曽利貝塚や松戸市上本郷貝塚は内湾に面する遺跡であり、埋積の進んでいない当時の東京湾が現在よりも深かったことを考えても、イルカが内湾奥深くまで来遊してくることはきわめて稀だったと思われます。そこで、東京湾沿岸の主な貝塚から出土した魚類のうち、特に出土量の多いスズキやクロダイ、マダイといった大形魚の組成を調べてみたところ、銛頭が出土する遺跡の多くでマダイの比率が高いことがわかりました。スズキやクロダイは内湾系貝塚で普遍的にみられる代表魚で、浅瀬にやってきたところを主にヤスを使った刺突漁や網漁で獲っていたと考えられています。一方のマダイは、本来、外洋沿岸性の魚で、現在の東京湾では水深のある外湾域にのみ生息していますが、当時の東京湾の内湾には外洋水の影響を受ける海底谷が残っており、これを通って沿岸浅瀬までマダイが回遊していた可能性が指摘されています。袖ケ浦市山野貝塚や木更津市永井作貝塚の銛頭が小型であるということも、イルカだけでなくマダイなどの大形魚を対象とした銛漁も行われていた可能性を示唆しているのかもしれません。

仙台湾から三陸南部では、狭小で奥深い入り江と岬が交互に連続するリアス式海岸が発達しており、入り江の内部にはハマグリやアサリを主体とする内湾系貝塚が、外海に面した岬にはスガイやクボガイを主体とする外洋系貝塚が分布しています。仙台湾に面する南境貝塚や沼津貝塚はハマグリやアサリを主体とする内湾系貝塚であり、スズキやイワシ類などの内湾性の魚類も多くみられます。一方で、外洋性のマグロやマダイを多産することでも有名で、銛頭はこれらの大形魚、特に沖合の表層に来遊するマグロを対象とした漁に使われていたと考えられています。同じ仙台湾周辺に位置する宮城県里浜貝塚では、小形魚を含めた魚類全体の分析が行われており、その結果、マグロなどの魚は全体でみると意外に少ないことがわかっています。このことから、沖合での銛漁は社会的・象徴的な意味合いを強く帯びた活動であった可能性も指摘されています。南境貝塚における南境型・沼津型銛頭を使ったマグロ漁にも食料確保のためだけでなく、特別な意味があったのかもしれません。

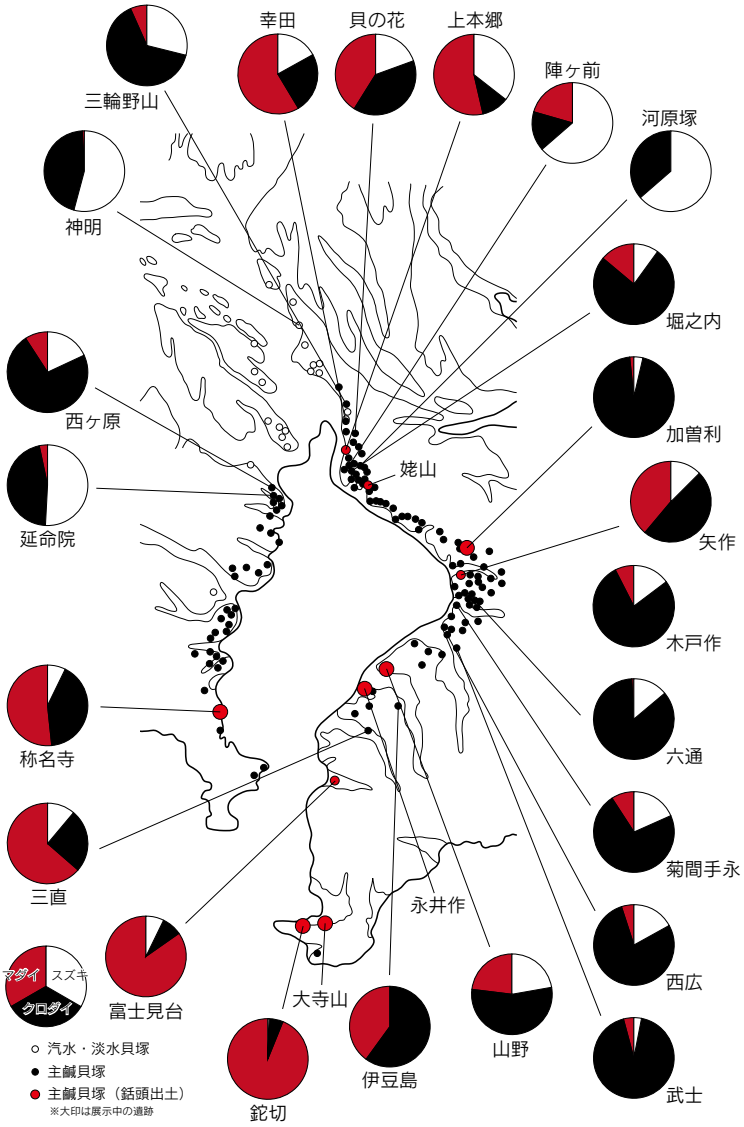


図６　東京湾沿岸の主な貝塚と魚類組成

弥生再葬墓と地域間交流

渡　邉　修　一

はじめに － 再葬という習俗

再葬とは、死者の遺体を一旦埋葬（一次埋葬）し、何らかの方法で白骨化させて改めて埋葬（二次埋葬）することをいいます。縄文時代、とくにその後期から晩期にかけては東北地方から九州地方まで比較的一般的にみられるようになり、弥生時代以降にも行われてきました。また、白骨化の際のプロセスによって「洗骨葬」や「焼骨葬」という場合もあります。

1　弥生再葬墓の成立

東海地方から関東へ　縄文時代晩期の近畿から東海西部周辺では、日常使われる土器（深鉢または甕）が納骨容器として使われる「土器棺墓」が盛行します。とくに縄文晩期後葉「突帯文（とったいもん）土器」期の滋賀県から愛知県にかけて大規模な土器棺墓群が認められます。弥生時代前期になると、それらの遺跡のうち、北部九州との共通性が強い「遠賀川（おんががわ）式土器」が定着した地域では土器棺墓は衰退します。一方、突帯文土器に後続する弥生土器である「条痕文（じょうこんもん）系土器」が主体となった尾張東部から三河地域では、引き続き土器棺墓が盛行しますが、縄文晩期には甕が使われていたのが、弥生時代になって主体的な器種となった大型の壺が使われるようになります。

かつては、東日本の弥生時代前期から中期にかけて盛行する、壺を納骨容器（壺棺）として埋置した墓が「再葬墓」とよばれていましたが、現実には再葬が行われた墓制の一部に過ぎないことから、弥生時代の大型壺を壺棺とする墓をとくに「壺棺再葬墓」、「弥生再葬墓」とよぶようになりました。ここでは「弥生再葬墓」とします。そして「弥生再葬墓」の源流の一つは、弥生前期の「条痕文系土器」の分布域である尾張東部から三河地域の土器棺墓にあると考えられます。

北部九州に定着した弥生文化が西日本全般に広がった際には、北部九州の土器によく似た「遠賀川式土器」が分布していくのと同じように、中部、関東に弥生文化が広がっていく際には、東海西部で成立した「条痕文系土器」や東海地方でつくられたと思われる「遠賀川系土器」が中部高地、東海東部、そして西関東に伝播していき、それぞれの地域の最初の弥生土器の成立に関与します。それらは一様に条痕施文を基調とし、また同時に、墓坑に壺棺を埋納する「弥生再葬墓」が広範に成立していきます。さらに、各地で弥生再葬墓が成立する際には、東海地方では基本的に単独埋置だったのが、複数の壺棺を埋置するものも出現します。

東北南部でも　東北地方南部では、関東地方に弥生再葬墓が成立するより以前に弥生再葬墓が成立します。福島県伊達市の根古屋（ねごや）遺跡、会津若松市の墓料（ぼりょう）遺跡では、ひとつの墓坑に複数の壺棺を埋置する墓制が弥生時代前期になると同時に成立し、そのうち最も古いと考えられている根古屋遺跡の３号墓坑には、縄文時代晩期終末に位置づけられる壺（並行関係としては西日本の弥生前期前半に相当）も含まれていました。東北地方では、日本海側を中心に、西日本の「遠賀川式土器」に似た「遠賀川系土器」が点々と分布し、中部、関東とは異なるルートで弥生文化が伝播したと考えられていますが、東北南部に伝播した際には、弥生再葬墓という墓制も同時に伝わったとも考えられます。ルートは明確ではありませんが、墓料遺跡から出土した東海産の条痕文系土器は一つのヒントかもしれません。

２　房総における弥生時代の始まり

縄文時代晩期になると、房総では遺跡数が激減します。とくに晩期後半の遺跡数は限られ、また大規模な遺跡もなくなります。遺跡内からは遺構もほとんど検出されず、小規模な遺物包含層が残されるだけの遺跡が多くみられます。このような遺跡の在り方は、おそらく、焼畑を行いながら短期で居住地を移動するために、痕跡が残りにくい比較的簡易な建物に居住していたことの反映かと思われます。この在り方は、弥生時代前期になっても基本的に変わりません。

そうした中で、縄文時代晩期終末から弥生時代中期初頭にかけて、東海系の初期弥生土器が断片的に搬入されるようになります。

表１　縄文晩期後葉～弥生中期初頭の外来系初期弥生土器出土遺跡

時　期	遠賀川系		条痕文系		
	東海以西からの搬入	在　地	東海からの搬入	岩櫃山式系	在地型突帯文？
荒海１式期		四街道・御山	四街道・御山 市原・武士		
荒海２式期					
荒海３式期	大網白里・上引切 横芝光・長倉宮ノ前	千葉・神門	成田・荒海川表 東金・道庭		
荒海４式期			成田・荒海 千葉・房地 千葉・バクチ穴 山武・名城 横芝光・長倉宮ノ前 多古・塙台 市原・唐沢	多古・塙台	四街道・池花 横芝光・長倉宮ノ前 芝山・高谷川低地

渡邉修一 2006「房総における弥生時代前期の地域的特質 (1)」『町と村調査研究』第８号　千葉県立房総のむら　から　一部加筆

表１は、縄文時代晩期終末「荒海（あらみ）１式・２式」期及び弥生時代前期・中期初頭「荒海３式・４式」期の外来系弥生土器が出土した遺跡を列挙したものです。荒海２式期は外来系土器の出土例がありませんが、遺跡数が少ない時期にもかかわらず、多くの遺跡に搬入されていることがわかります。中部高地や東海東部、西関東に弥生文化を伝えた人たちの一部が、さらにその先の房総にも情報を伝え、その痕跡として土器を残していると思われます。とくに荒海４式期の遺跡数は多く、この時期に他地域の人が多く訪れた可能性があります。現在のところ、弥生再葬墓が房総で初めて営まれる時期も弥生時代中期初頭で、この符合は深い意味があるといえます。

３　房総最初の弥生再葬墓

多古町塙台（はなわだい）遺跡BSE-6　塙台遺跡は栗山川右岸にある独立台地上の遺跡で、数次にわたる調査が行われ、その結果、群集規模では関東最大級の64基もの弥生再葬墓が検出されました。その中で、最も古い段階に位置づけられるものの一つがBSE-6です。ここでは合計５個体の壺棺が埋置されていましたが、うち３個体は互いにもたれかかるように置かれ、他の２個体はそれぞれ離れて置かれていました。時期は弥生時代中期初頭で、もたれかかるように置かれた３個体は東関東の在地の土器、残りは東海東部の

図１　塙台遺跡BSE-6出土土器

丸子式土器と西関東の岩櫃山式系の土器でした。この弥生再葬墓は、房総における弥生再葬墓の初現期の遺構であるばかりでなく、そこには３つの地域の土器が共存し、墓坑内の配置も３つに分かれるという象徴的な遺構ということができます。

塙台遺跡BSE-6が営まれた時期は、表１の時期区分では荒海４式期にあたります。荒海式は、かつては関東の縄文晩期後葉の土器型式とされていましたが、この20年ほどの調査研究によって、その後半は弥生時代に相当し、その終末は弥生中期初頭であるという確信を持ちました。この段階の代表的な集落遺跡に横芝光町長倉宮ノ前遺跡があります。この遺跡は、竪穴建物跡などの遺構は検出されていませんが、調査された遺物包含層には径10mほどの濃密な集中地点があり、生活用具である土器の器種も豊富で、短期間ではあっても明らかな居住の痕跡とみられます。縄文晩期の土器群と比較して、新しい器種である壺の比率が高く、その中には、遠賀川系、東海系条痕文、在地系突帯文（西関東か）など外来系の土器が多数含まれていました。

弥生前期末から中期初頭にかけて、東海地方をはじめとする先進的な文化を知る人々が往来し、メッセンジャーとしての役割を果たしたこと、そして弥生再葬墓という墓制をももたらし、さらには在来の人々と一緒に同じ墓坑に葬られるという象徴的な事象をここに見ることができます。

塙台遺跡では、ほかにも弥生中期初頭に位置づけられる弥生再葬墓がありますが、外来系土器が出土している場合はいずれも東海系または西関東系の土器でした。

なお、塙台遺跡以外では、千葉市若葉区の南屋敷遺跡でも中期初頭の弥生再葬墓が検出されていますが、こちらは在地系の土器が単独で埋置されていました。

４　北方との交流

多古町塙台遺跡BSE-3

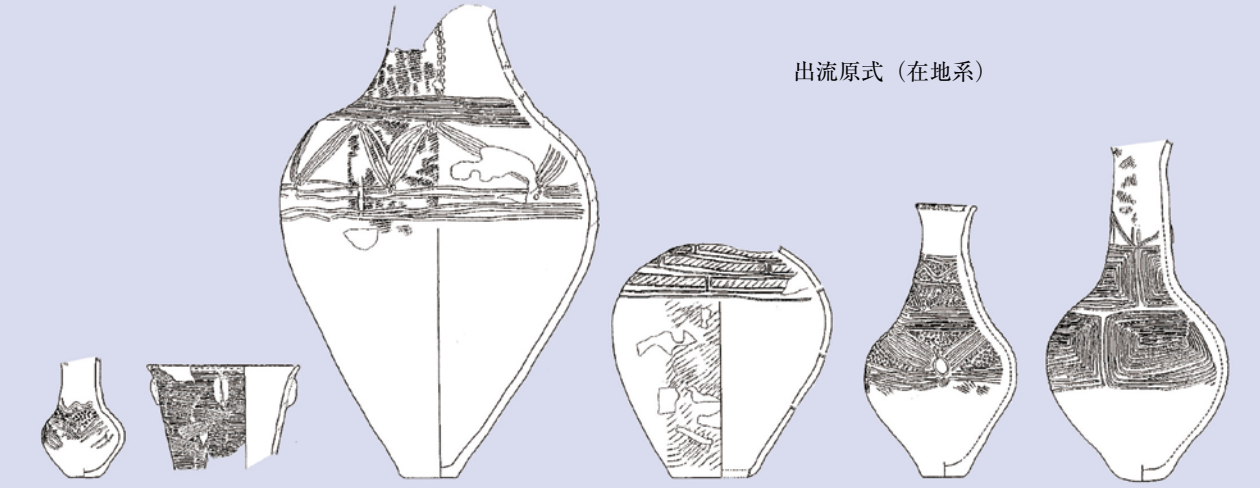
BSE-3は、塙台遺跡ではBSE-6の次の段階の弥生再葬墓です。筆者は弥生時代中期前葉と考えています。この段階になると、東海系の外来系土器が伴わなくなることがはっきりしてきました。外来系土器としては

図２　塙台遺跡BSE-3出土土器

磨消縄文による渦巻文を伴う、関東北東部の狢式系の土器があります。また、その隣の鉢形土器も磨消縄文による区画文を持っており、狢式や南東北の南御山１式などにも共通する要素です。伴っていたのは在地系の壺２個体です。肩が張り、体部に条痕を持つ点などBSE-6出土の在地系土器と同じですが、口縁部が明確な折返し状になるなど新しい要素がみられます。

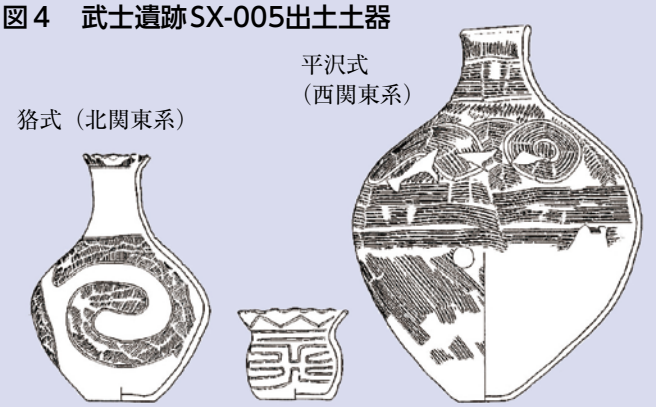
塙台遺跡では、これに続く弥生時代中期中葉の弥生再葬墓は多いですが、それらにおける外来系土器は、狢式土器と平沢式土器（西関東系）の両者がみられるようになり、在地系土器は関東平野中央部から南関東まで広く分布する、太い沈線で幾何学的文様を描く出流原式土器へと変わります。

図３　武士遺跡SX-001出土土器



市原市武士遺跡SX-001・SX-005　中期中葉の弥生再葬墓群が検出された武士遺跡でも、出流原式土器、狢式土器、平沢式土器が出土しています。この遺跡が塙台遺跡と異なる点は、在地系の出流原式土器が同一墓坑内で外来系土器と共伴しないということです。SX-001（２基の弥生再葬墓の重複または連接）では、すべての土器が出流原式の範疇に収まるものでした。一方で、SX-003からSX-005という３基の弥生再葬墓は、SX-001とはかなり空白を空けて分布し、埋置された土器はいずれも平沢式土器で、うちSX-005では狢式土器が同一墓坑内で共伴していました。

図４　武士遺跡SX-005出土土器



房総の弥生再葬墓における狢式系統の壺棺の出土例は意外なほど多いので、中期中葉を中心に北関東さらには南東北と活発な人的交流が行われていたことは間違いないのですが、その墓坑内での在り方は遺跡によって異なり、個々の集団間で外来の人物に対する受け入れ方が違っていた可能性があります。また、中期初頭までは東海方面との人的交流が活発だったのに対し、中期中葉には北関東方面との人的交流が明らかに活発になっています。とくに後者における交流の目的は何だったのかが、今後の研究の課題になると考えられます。

房総から南東北へ－人とモノの移動－

栗　田　則　久

はじめに

７世紀後半になると、中央集権的な古代国家となる律令国家への胎動（たいどう）の中で、支配の及んでいない東北地方の人々を「蝦夷（エミシ）」と見なし、城柵（じょうさく）を設置して支配を展開していきます。太平洋岸では、仙台市郡山（こおりやま）遺跡が７世紀後半に、日本海側では、実態がよく分かっていませんが、渟足柵（ぬたり）・磐舟柵（いわふね）が７世紀中頃に設置されたようです。

一方で、６世紀後半以降、関東に出自が求められる土師器（はじき）が太平洋岸の福島県や宮城県・岩手県の拠点的な集落などから多く出土しており、城柵設置以前の段階に関東地方からの人とモノの移動があったことを示しています。

ここでは、その状況をうかがうことができる遺物や遺構を取り上げて検討していきます。

１　関東系土師器

（１）栗囲式土器と鬼高式土器

古墳時代後期の東北地方南部を代表する土師器は、仙台市栗遺跡を標識遺跡とすることから、「栗囲（くりがこい）式土器」と呼ばれています（図１）。栗囲式土器の杯は丸底で、底部との境に段を形成して長い口縁部が開く形態をしています。また、内面全体に炭素吸着による黒色処理が施される特徴を持っています。

図１　栗囲式土器
（仙台市郡山遺跡）

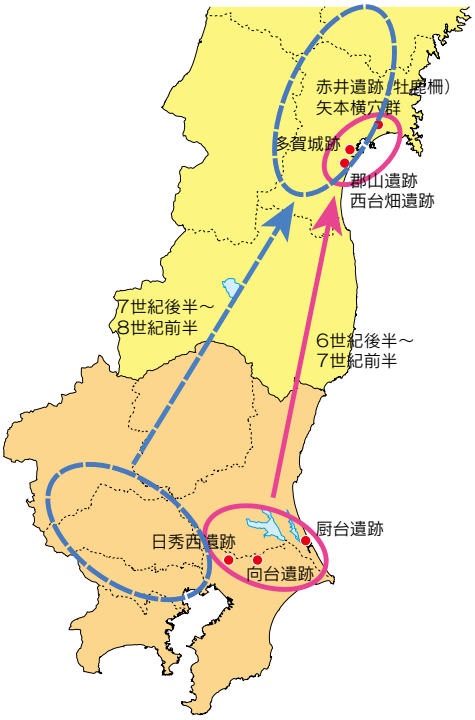


図２　関東系土器の伝播ルート

一方、南関東地方を中心に広がる古墳時代後期の土師器は、市川市鬼高（おにたか）遺跡を標識遺跡とすることから、「鬼高式土器」と呼ばれています。この土師器の杯は須恵器（すえき）模倣の形態が一般的で、口縁部が短く立ち上がり、内面に漆塗りの黒色処理を加える特徴があります（図４）。

（２）鬼高系土器

東北地方南部を中心に、在地の栗囲式土器とは器形や製作技法が異なり、関東地方の特徴を持っている土器を「関東系土師器」と呼んでいま

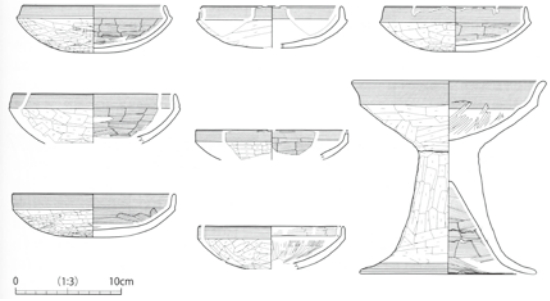


図３　鬼高系土器（仙台市西台畑遺跡）

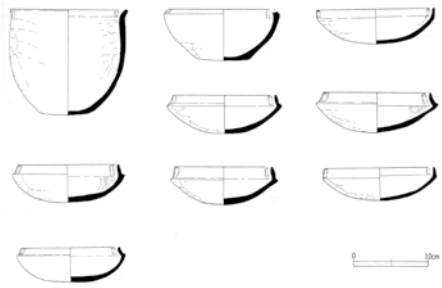


図４　鬼高式土器（鹿嶋市厨台遺跡）

す。その中でも、千葉県や茨城県の東関東地方、特に茨城県南部から千葉県北部の霞ヶ浦水系沿岸地域に出自が求められる土師器を「鬼高系土器」と呼んでいます（図３）。関東系土師器は仙台平野を中心に分布し、６世紀後半から７世紀前半頃までは霞ヶ浦水系沿岸地域、７世紀後半以降は埼玉県北部から群馬県南部を中心とする地域の影響が想定されています（図２）。また、このような関東系土師器は、関東地方から直接持ち込まれたのではなく、現地で生産された可能性が高いと考えられています。

（３）東北地方南部への移動

大和政権は、東北地方への支配を広げるために政治的・軍事的拠点となる「城柵」を設置し（図５）、その造営や運営のために「柵戸（さくこ、きのへ）」と呼ばれる移民を東国から集めています。『続日本紀』などの文献史料には、霊亀元（715）年５月の上総などの坂東六カ国の富民千戸の陸奥国への移住から、延暦21（802）年の上総・下総などの浪人４千人の陸奥国胆沢城への移住まで、断続的に柵戸として移民が送り込まれていることが記されています。

この記事は、律令国家による対蝦夷政策を示しているものですが、考古学的にみると、仙台平野を中心に分布する古墳時代後期の鬼高系土器に、柵戸以前からの当該地域間での移住をみることができます。東北地方の太平洋岸最古の城柵として知られる仙台市郡山遺跡では、７世紀後半のⅠ期官衙以前の６世紀末頃から始まる集落が確認されています。その中に、多くの鬼高系土器が含まれており（図６）、その集落形成の背景には集団移住を伴う地域間交流が存在していたようです。

図５　東北の城柵の広がり

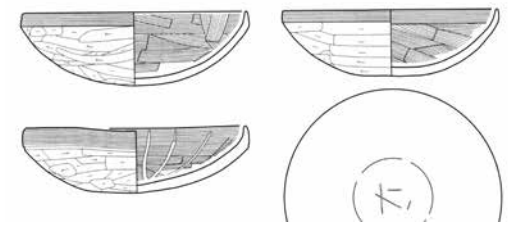


図６　鬼高系土器（仙台市郡山遺跡）

２　古墳の出土品からみる交流

（１）二円（方）窓鍔付き直刀

２つの円形あるいは方形の窓が開けられたきわめて特徴的な鍔で、６世紀後半～７世紀後半頃までの古墳や横穴の副葬品として出土しています。一般的にみられる六口あるいは八口の窓が付く鍔は、装飾的な意味合いが強いとされていますが、二円（方）窓は、２つの孔に紐を通して手首などに巻いて落下を防ぐ実

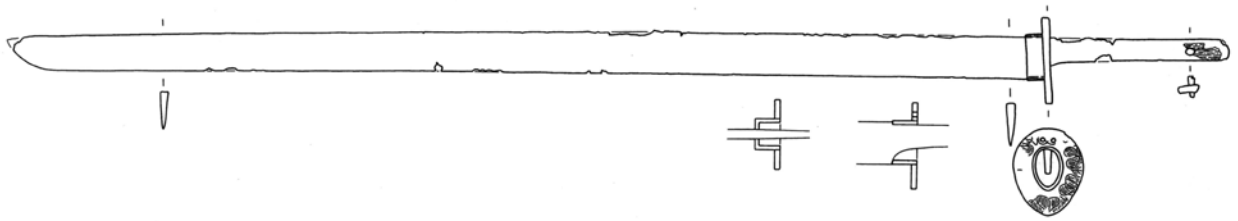


図７　二円窓鍔付き直刀（宮城県仙台市大年寺山横穴）

用的なものと思われます（図８）。

千葉県を中心に、関東地方や東北地方南部に広がりを見せています。時期的にみると、香取市（旧栗源町）台の内古墳と山武市（旧山武町）胡摩手台16号墳の２例が６世紀後半～末葉と最も古く、このタイプの鍔は、下総東部地域で出現し、その後、県内、関東地方及び東北地方にまで広がっていったようです（図９）。

いわき市小申田横穴群　山武市胡摩手台16号墳　千葉市六通金山１号墳

図８　二円（方）窓の鍔

胡摩手台16号墳は、古墳時代の武社国最後の首長墓として位置づけられています。一方、６世紀末頃に築造が開始される宮城県仙台市大年寺山横穴群（図７）は、金銅装大刀や馬具などの副葬品から、身分の高い首長が埋葬されている可能性が高く、付近に所在する郡山遺跡との関わりも想定されています。また、ほぼ同時期と考えられる福島県いわき市小申田横穴群最古の横穴からは、金銅装の飾弓などの豊富な副葬品が出土しています。下総東部と東北地方の首長間での交流の中で、特異な形態の鍔が伝わっていったのかもしれません。

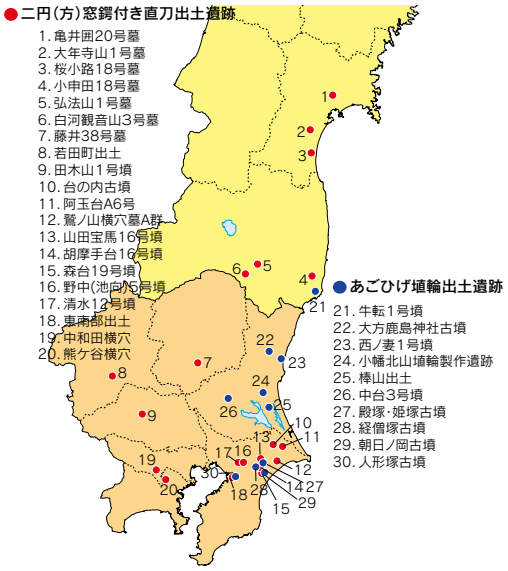


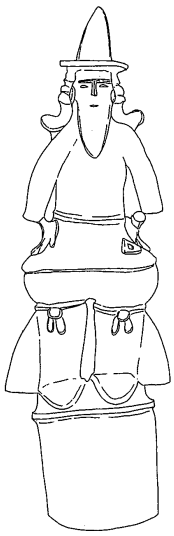
図９　二円（方）窓鍔・あごひげ埴輪分布図

（２）あごひげの人物（武人）埴輪

古墳に樹立された埴輪の中にも北との交流がうかがわれるものがあります。それは、「髭の武人」とも呼ばれる人物埴輪です。あごひげを伴う逆三角形の顔、Ｔ字形につながる眉と鼻、高い山高帽風の三角冠、束ねた髪を紐で縛るような表現をしたＬ字形の下げ美豆良など、独特の特徴があります。

千葉市人形塚古墳

横芝光町姫塚古墳



山武市経僧塚古墳

図10　あごひげの人物埴輪（図は、城倉正祥2009『埴輪生産と地域社会』のスケッチ図を掲載）

県内の代表的な例として、横芝光町殿塚古墳・姫塚古墳、千葉市人形塚古墳があげられます。この他に、山武市経僧塚古墳・朝日ノ岡古墳・西ノ台古墳でも確認されており、九十九里沿岸の大型古墳が分布の中心となっています（図９・10）。この中心地域より離れた東京湾岸に位置する人形塚古墳は、殿塚古墳と同様の長方形周溝、経僧塚古墳と類似した石室を有するなど、九十九里沿岸地域の影響を受けた古墳と考えられています。この状況下であごひげの武人埴輪がもたらされたようです。

このタイプの埴輪は茨城県内で多く確認されており、分布の中心となっています。殿塚古墳や姫塚古墳のあごひげの埴輪の中には、胎土（たいど）中に筑波山周辺地域で生産された可能性が高い雲母を含む個体が含まれており、霞ヶ浦を経由して九十九里沿岸にもたらされたものと想定されています。一方、東北地方で唯一確認される福島県いわき市牛転（うしころばし）１号墳の埴輪は、頭部表現に大きな違いがありますが、生産地は茨城県内に求められるものと思われます（図９・11）。

常陸太田市大方鹿島神社古墳　　いわき市牛転１号墳

図11　あごひげの人物埴輪頭部

３　高壇式横穴

横穴墓は、古墳時代後期～終末期に集中し、九州から東北まで広く分布しています。千葉県内の横穴は4,500基ほど確認され、全国的にみても密集地域といえます。その中の遺体を置く「玄室（げんしつ）」と呼ばれる部屋の床面が高い位置に設けられる特徴を有する横穴を「高壇式横穴（こうだんしき）」と呼んでいます。このタイプの横穴は、６世紀末葉～７世紀初頭頃に西上総地域で出現しますが、その後は東上総地域に伝わって定着し、「長生型（ちょうせい）」とも呼ばれています。

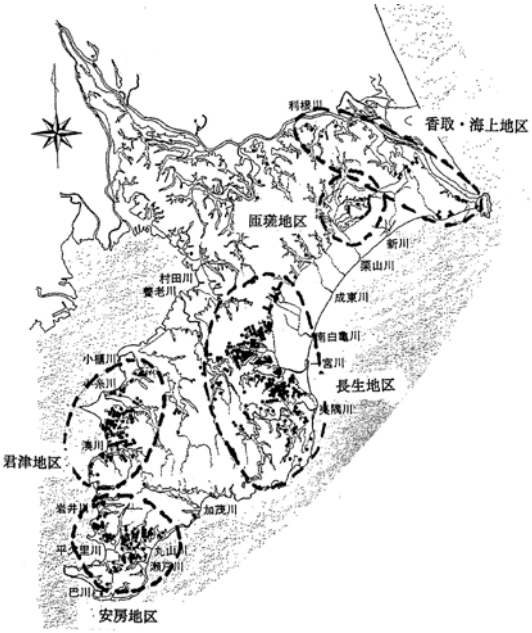
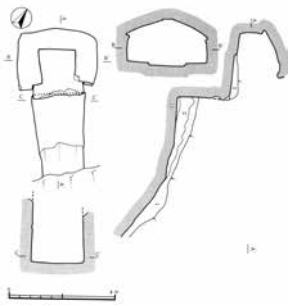
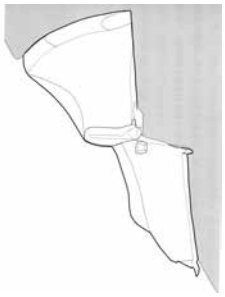


図12　県内横穴分布図

東北地方での高壇式横穴は、宮城県中部の仙台湾沿岸に位置する東松島市（旧矢本町）矢本横穴群のみに確認されています。この横穴群は、総数107基中65基が調査され、内９基が高壇式横穴となっています。矢本横穴群は、７世紀中頃から築造が開始されますが、当初から高壇式が採用されています。この高壇という特徴的な形状からみると、矢本横穴群の高壇式横穴は、東上総地域の影響を強く反映したことが考えられています。一方で、玄室の構造などに差異があり、在地の低壇の変化形態と捉える考え方もあります。ただ、矢本横穴群の有力な被葬者の集落として想定されている東松島市赤井遺跡（後の陸奥国牡鹿柵（おじかのさく））では、多くの関東系土師器が出土しており、赤井遺跡及び矢本横穴群の形成に関東の関与があった可能性が想定されます。



茂原市山崎横穴群



東松島市矢本横穴群

図13　高壇式横穴

東北から房総へ－俘囚の移配－

栗　田　則　久

はじめに

律令国家は、蝦夷支配のための拠点である城柵をさらに東北北部まで設置し、さらなる領域の拡大を目指す中で、これに不満を持つ蝦夷の激しい反乱がたびたび起こるようになりました。宝亀５（774）年の蝦夷による桃生城襲撃事件以降、弘仁２（811）年の蝦夷征討をもって終結が宣言されるまでのいわゆる「三十八年戦争」によって、陸奥や出羽の多くの蝦夷が捕虜や投降者となり、彼らを「俘囚」として関東以西の地に強制的に移住させる国家的な政策が実施されています。俘囚移配については、『続日本紀』の神亀２（725）年閏正月４日条に移配の記事が初見されて以降、延暦19（800）年頃まで行われていたようです。移配先については、『延喜式』記載の俘囚料が計上されている国（表１）及び『和名類聚抄』にみられる「俘囚郷」という郷名から知ることができ、畿内を除く多くの国があげられています。

	国名	数量（束）	備　　考
東海道	常陸	100,000	安房・伊豆・三河・尾張・志摩・伊賀国は計上なし
	下総	20,000	
	上総	25,000	
	武蔵	30,000	
	相模	28,600	
	甲斐	50,000	
	駿河	200	
	遠江	26.800	
	伊勢	1,000	
東山道	下野	100,000	飛騨国は計上なし 上野国碓井・多胡・緑野郡に俘囚郷あり
	上野	10,000	
	信濃	3,000	
	美濃	41,000	
	近江	105,000	
北陸道	佐渡	2,000	若狭国は計上なし
	越後	9,000	
	越中	13,433	
	加賀	5,000	
	越前	10,000	
山陰道	出雲	13,000	丹波・丹後・但馬・石見・隠岐国は計上なし
	伯耆	13,000	
	因幡	6,000	
山陽道	備中	3,000	備後・安芸・周防・長門国は計上なし 周防国吉敷郡に俘囚郷、播磨国加古郡・賀茂・美嚢郡に夷俘あり
	備前	4,340	
	美作	10,000	
	播磨	75,000	
南海道	土佐	32,688	紀伊・淡路・阿波国は計上なし
	伊予	20,000	
	讃岐	10,000	
西海道	日向	1,101	豊前・薩摩・大隅・壱岐・対馬国は計上なし
	豊後	39,370	
	肥後	173,435	
	肥前	13,090	
	筑後	44,082	
	筑前	57,370	

数量（束）は俘囚料としての稲数
俘囚郷・夷俘郷は『和名類聚抄』記載

表　『延喜式』主税上の「俘囚料」計上国

武廣亮平 2017「文献史学からみた移配国における俘囚と夷俘」『「俘囚・夷俘」とよばれたエミシの移配と東国社会』表２を改変

一方で、９世紀になると移配された俘囚による反乱がみられます。反乱の記事については、『類聚国史』弘仁５(814)年２月10日条記載の出雲国の他、上総国･下総国にみることができます。上総国では､『続日本後記』喜祥元(848)年２月10日条の上総国俘囚丸子廻毛らの「叛逆」､『日本三代実録』貞観12（870）年12月２日条の放火や略奪､同元慶７（878）年２月９日条の上総国市原郡の俘囚30余人の反乱がみえます。下総国では､『日本三代実録』貞観17（875）年５月10日条に、俘囚の反乱による官寺（国分寺？）の放火と良民殺害の記事があります。このように、特に上総国では俘囚との関係が大きな問題だったようです。

１　長煙道カマドの住居

カマドは、古墳時代中期頃から竪穴住居の施設として採用され、一般的には短い煙道部が設けられています（図１）。一方、東北地方では、７世紀以降長い煙道部を付設するいわゆる「長煙道カマド」をもつ竪穴住居が定着していきます（図

図１　短煙道カマド（印西市鳴神山遺跡）

図２　長煙道カマド（仙台市郡山遺跡）

２)。関東地方での古墳時代後期に遡る長煙道カマドは、主に茨城県・千葉県で少数ながら確認されます。茨城県では鹿島神宮周辺の鹿嶋市厨台遺跡群や宮中野古墳群、千葉県では市原市草刈遺跡や我孫子市日秀西遺跡などに見られますが、各遺跡１軒ないし２軒ときわめて客体的な存在です。この様相が一変するのが奈良時代以降で、東京湾沿岸地域の市原市・袖ケ浦市・木更津市に集中しています。古代の郡としては、上総国市原郡・海上郡・望陀郡に相当する範囲と考えられます。その中の主な遺跡を取り上げて特徴をまとめてみます。

市原市坊作遺跡は、上総国分寺建立を契機として８世紀中頃に成立した集落です。奈良・平安時代の遺構は、竪穴住居跡119軒、掘立柱建物跡30棟、鍛冶遺構２基などが調査されています。長煙道カマドの時期的な割合は、集落開始頃の８世紀中葉～後葉が約半数、８世紀末葉～９世紀中葉はほとんどの住居が長煙道カマドとなっています。集落成立段階に鍛冶遺構が伴っていることからは、鉄器生産などの技術者を含む移住集団が上総国分寺の造営に関わっていたことが想定されます。このような状況は、上総国府との関係が強い市原市稲荷台遺跡や製鉄の遺構・遺物が伴う萩ノ原遺跡でもみることができます。

袖ケ浦市永吉台遺跡群（遠寺原・西寺原地区）でも多くの長煙道カマドが確認されています。遠寺原地区は８世紀中葉～10世紀前半の集落で、集落成立時期から９世紀末まではほぼすべての住居に長煙道カマドが付設されていることから、この地区は移配された俘囚集団の集落と考えられます。また、西寺原地区は９世紀後半～10世紀末までの集落で、遠寺原地区を拠点とした新たな開発によって成立した集落と考えられます。この地区では土器焼成遺構が60基調査されており、俘囚集団の中に土器生産の技術者が含まれていた可能性があります。木更津市久野遺跡や二重山遺跡でも長煙道カマドが多く存在し、鍛冶遺構が伴っています。

図３　長煙道カマドの遺跡分布図

図４　市原市萩ノ原遺跡

図５　袖ケ浦市永吉台遺跡群
西寺原地区

以上のように、東北由来の長煙道カマドをもつ竪穴住居を多く含む集落は、国府や国分寺の造営、製鉄や土器生産の労働者として位置づけられた側面を伺うことができます。

２　蝦夷の刀 蕨手刀

刀の柄の先端に山菜のわらびに似た渦巻き状の突起があることから名付けられています。古墳時代の終わり頃から平安時代にかけて全国で320点ほど確認され、その大部分は東日本にあります。発祥の地

は、長野県あるいは群馬県とされていますが、そこから北日本に伝わり、特に宮城県・岩手県・北海道に集中しています。この地域で定着したことから、「蝦夷の刀」とも呼ばれています。蕨手刀はいくつかのタイプに分かれますが、柄の部分に毛抜きのような形状の透かしが入る「毛抜型蕨手刀」は、９世紀中頃に東北地方で改良された蕨手刀と考えられており、関東以西にはほとんど例のない「蝦夷」を出自とした刀です。

図６　毛抜型蕨手刀（宮城県多賀城跡）

図７　市原市南大広遺跡

この毛抜型蕨手刀が、千葉県の市原市南大広遺跡と袖ケ浦市根形台遺跡群で各１点出土しています。南大広遺跡では、寺と思われる基壇の中央の土坑から切っ先を上に向けた状態で検出され、寺の地鎮に使われたと思われる鎮壇具としての性格を有していたようです。時期は明確ではありませんが、９世紀代と考えられています。根形台遺跡群では、木棺を伴う土坑墓の副葬品として出土しています。蕨手刀は、東北北部や北海道に特有の「末期古墳」と呼ばれる墳墓からの出土が多く、埋葬された有力な蝦夷の存在を表しています。根形台遺跡群の土坑墓の被葬者も蝦夷の有力者とみることができるかもしれません。

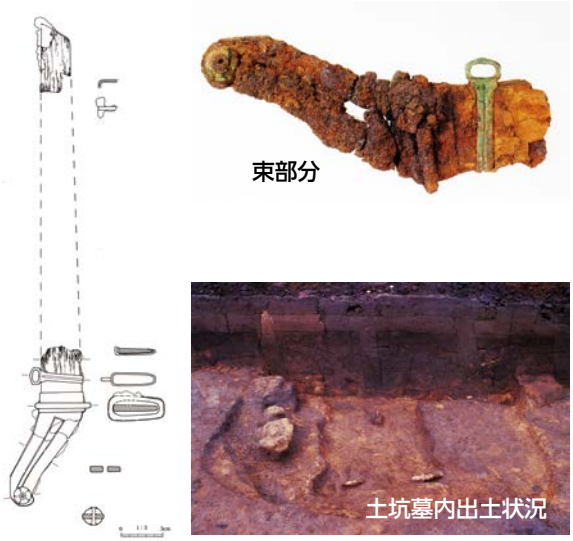


図８　袖ケ浦市根形台遺跡群

市原市及び袖ケ浦市は、前述したように、長煙道カマドをもつ俘囚の集落が集中していること、俘囚の反乱がたびたび起きていることなどから、当該地域に移配された俘囚集団は、蕨手刀を所有できるような首長層に率いられた高い意識や強いまとまりを持っていたのではないかと推測されます。

３　出土文字資料と東北

千葉県の匝瑳市（旧八日市場市）平木遺跡で、「遠田勲」と書かれた墨書土器が出土しています。「遠田」は遠田郡という郡名のことを指していると思われます。田夷（水田農業を生業とする蝦夷）の村をその

図９　匝瑳市平木遺跡出土墨書土器「遠田勲」

まま郡とした蝦夷の郡で、宮城県北部、北上川下流域に想定されています。遠田郡の初見は『続日本紀』天平９（737）年四月条にあり、「田夷遠田郡領外従七位上遠田君雄人を差して、海道に遣す」と記載されています。平木遺跡の墨書土器は８世紀中葉頃と想定され、初見記事とほぼ同様の時期となります。このことから、九十九里沿岸地域と北上川下流域の間で、海上交通による関係が存在していたと思われます。遠田郡の海側に位置する牡鹿郡には、古墳時代の関東系土師器を出土する東松島市（旧矢本町）赤井遺跡やその有力者の墓域とされる矢本横穴群が所在しています。

図10　宮城県東松島市赤井遺跡出土刻書土器「春□」

赤井遺跡では、須恵器甕の頸部に「春□」と書かれた刻書土器が出土しています。この春を考える上で参考となるのが、「武射臣」の賜姓記事です。『続日本紀』神護景雲３（769）年三月条に「牡鹿郡人正八位下春日部奥麻呂等三人武射臣」とあり、陸奥国の大国造道嶋宿禰嶋足の申請によって牡鹿郡の郡領クラスの在地有力者である春日部奥麻呂等が武射臣という姓を賜ったという内容です。「武射」は、九十九里沿岸に位置する古代の「上総国武射郡」という郡名を指すとともに、古墳時代の国造制下では「武社国」に相当します。このことは、春日部奥麻呂等の出身地が武射郡であること、海を渡って牡鹿郡の地に移住したことが想定されます。

図11　「春日部」記載人面墨書土器（袖ケ浦市上大城遺跡）

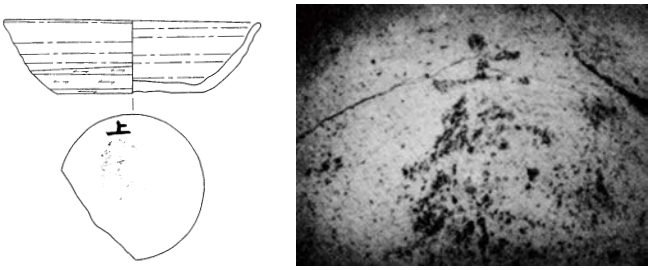


図12　「上総□」墨書土器（岩手県太田方八丁遺跡、志波城跡）

この他に、陸奥国最北端の志波城と推定されている岩手県盛岡市太田方八丁遺跡では、９世紀前半代の「上総□」と読める墨書土器が出土しています。この遺跡は北上川上流域に所在し、牡鹿郡とは川でつながっています。また、日本海側の丘陵上に位置する出羽国秋田城跡では、８世紀末に廃棄された多くに木簡の中に、「上総国部領解　申宿直／合五人　火」と書かれた資料が出土しています。上総国から送られた兵を率いる部領使が、秋田城の警備にあたるために宿直する部下の５人の名前を報告した内容です。このことから、この頃に上総国の兵が出羽国の秋田城に送られていたことが分かります。

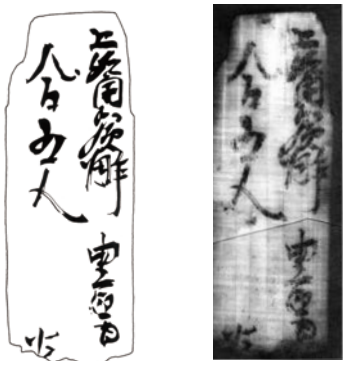


図13　「上総国・・・・・」木簡（秋田市秋田城跡）

令和２年度出土遺物公開事業
関連講演会

「北方交流録」
～北とつながる五つの物語～
講演要旨

令和３年１月29日　発行

編集・発行　公益財団法人 千葉県教育振興財団
〒284-0003　四街道市鹿渡809番地の2
TEL. 043（424）4850
印刷　株式会社エリート情報社［印刷出版局］